

障害者の日常生活及び社会生活を総合的に支援するための法律に基づく障害福祉サービス事業の設備及び運営に関する基準を定める条例をここに公布する。

平成二十四年十二月二十五日

広島県知事 湯 崎 英 彦

## 広島県条例第六十五号

障害者の日常生活及び社会生活を総合的に支援するための法律に基づく障

害福祉サービス事業の設備及び運営に関する基準を定める条例

### 目次

- 第一章 総則（第一条―第三条）
- 第二章 療養介護（第四条―第二十九条）
- 第三章 生活介護（第三十条―第四十七条）
- 第四章 自立訓練（機能訓練）（第四十八条―第五十二条）
- 第五章 自立訓練（生活訓練）（第五十三条―第五十七条）
- 第六章 就労移行支援（第五十八条―第六十六条）
- 第七章 就労継続支援A型（第六十七条―第八十一条）
- 第八章 就労継続支援B型（第八十二条―第八十四条）
- 第九章 多機能型に関する特例（第八十五条―第八十七条）
- 第十章 雑則（第八十八条）

### 附則

#### 第一章 総則

##### （趣旨）

第一条 この条例は、障害者の日常生活及び社会生活を総合的に支援するための法律（平成十七年法律第二百二十三号。以下「法」という。）第八十条第一項の規定に基づき、障害福祉サービス事業の設備及び運営に関する基準を定めるものとする。

##### （定義）

第二条 この条例で使用する用語は、法で使用する用語の例による。

2 前項に定めるもののほか、この条例において、次の各号に掲げる用語の意義は、それぞれ当該各号に定めるところによる。

- 一 利用者 障害福祉サービスを利用する障害者をいう。
- 二 常勤換算方法 事業所の従業者の勤務延べ時間数を当該事業所において常勤の従業者が勤務すべき時間数で除することにより、当該事業所の従業者の員数を常勤の従業者の員数に換算する方法をいう。

三 多機能型 第三十条に規定する生活介護の事業、第四十八条に規定する自立訓練（機能訓練）の事業、第五十三条に規定する自立訓練（生活訓練）の事業、第五十八条に規定する就労移行支援の事業、第六十七条に規定する就労継続支援A型の事業及び第八十二条に規定する就労継続支援B型の事業並びに児童発達支援（児童福祉法（昭和二十二年法律第六十四号）第六条の二第二項に規定する児童発達支援をいう。以下同じ。）の事業、医療型児童発達支援（同条第三項に規定する医療型児童発達支援をいう。以下同じ。）の事業、放課後等デイサービス（同条第四項に規定する放課後等デイサービスをいう。以下同じ。）の事業及び保育所等訪問支援（同条第五項に規定する保育所等訪問支援をいう。以下同じ。）の事業のうち二以上の事業を一体的に行うこと（同法に規定する事業のみを行う場合を除く。）をいう。

（障害福祉サービス事業者の一般原則）

第三条 障害福祉サービス事業を行う者（以下「障害福祉サービス事業者」という。）（第四条に規定する療養介護の事業、第三十条に規定する生活介護の事業、第四十八条に規定する自立訓練（機能訓練）の事業、第五十三条に規定する自立訓練（生活訓練）の事業、第五十八条に規定する就労移行支援の事業、第六十七条に規定する就労継続支援A型の事業及び第八十二条に規定する就労継続支援B型の事業を行うものに限る。）は、利用者の意向、適性、障害の特性その他の事情を踏まえた計画（以下「個別支援計画」という。）を作成し、当該個別支援計画に基づき当該利用者に対して障害福祉サービスを提供するとともに、その効果について継続的な評価を実施することその他の措置を講じることにより、当該利用者に対して適切かつ効果的に障害福祉サービスを提供しなければならない。

2 障害福祉サービス事業者は、利用者の意思及び人格を尊重して、常に、当該利用者の立場に立った障害福祉サービスの提供に努めなければならない。

3 障害福祉サービス事業者は、利用者の人権の擁護、虐待の防止等のため、職員に対する研修の実施、責任者の設置その他の必要な措置を行うものとする。

## 第二章 療養介護

（基本方針）

第四条 療養介護の事業は、利用者が自立した日常生活又は社会生活を営むことができるよう、専ら法第五条第六項に規定する厚生労働省令で定める者に対して、身体その他の状況及びその置かれている環境に応じて、機能訓練、療養上の管理、看護、医学的管理の下における介護及び日常生活上の世話を適切かつ効果的に行うものでなければならない。

(構造設備)

第五条 療養介護の事業を行う者（以下「療養介護事業者」という。）が当該事業を行う事業所（以下「療養介護事業所」という。）の配置、構造及び設備は、利用者の特性に応じて工夫され、かつ、日照、採光、換気等利用者の保健衛生に関する事項及び防災について十分考慮されたものでなければならない。

(管理者の資格要件)

第六条 療養介護事業所の管理者は、医師でなければならない。

(運営規程)

第七条 療養介護事業者は、療養介護事業所ごとに、次に掲げる事項を記載した事業の運営についての重要事項に関する運営規程を定めておかなければならない。

- 一 事業の目的及び運営の方針
- 二 職員の職種、員数及び職務の内容
- 三 利用定員
- 四 療養介護の内容並びに利用者から受領する費用の種類及びその額
- 五 サービスの利用に当たつての留意事項
- 六 緊急時等における対応方法
- 七 非常災害対策に関する事項
- 八 事業の主たる対象とする障害の種類を定めた場合には、当該障害の種類
- 九 虐待の防止のための措置に関する事項
- 十 その他事業の運営についての重要事項

(非常災害対策)

第八条 療養介護事業者は、療養介護事業所に消火設備その他の非常災害に対処するための必要な設備を設けるとともに、非常災害に対処するための具体的な計画を立て、非常災害時における関係機関への通報及び連携体制を整備し、それらを定期的に利用者及び職員に周知しなければならない。

2 療養介護事業者は、非常災害に備えるため、定期的に避難訓練、救出訓練その他必要な訓練を行わなければならない。

(規模)

第九条 療養介護事業所の施設並びに設備及び備品は、二十人以上の人員が利用できるものでなければならない。

(設備)

第十条 療養介護事業所は、医療法（昭和二十三年法律第二百五号）に規定する病院とし

て必要とされる設備及び多目的室その他運営上必要な設備を設けなければならない。

2 前項に規定する設備は、専ら当該療養介護事業所の用に供するものでなければならない。ただし、利用者の支援に支障がない場合は、この限りでない。

(職員)

第十一条 療養介護事業者が療養介護事業所ごとに置くべき職員は、次の各号に掲げるものとし、その員数は、それぞれ当該各号に定めるところによる。

一 管理者 一

二 医師 健康保険法(大正十一年法律第七十号)第六十五条第四項第一号に規定する厚生労働大臣の定める基準以上

三 看護職員(看護師、准看護師又は看護補助者をいう。次号において同じ。) 療養介護の単位ごとに、常勤換算方法で、利用者の数を二で除して得た数以上

四 生活支援員 療養介護の単位ごとに、常勤換算方法で、利用者の数を四で除して得た数以上。ただし、看護職員が、常勤換算方法で、利用者の数を二で除して得た数以上置かれている療養介護の単位については、当該療養介護の単位に置かれている看護職員の数から利用者の数を二で除して得た数を控除して得た数を生活支援員の数に含めることができるものとする。

五 サービス管理責任者(障害福祉サービスの提供に係るサービス管理を行う者として知事が定めるものをいう。以下同じ。) イ又はロに掲げる利用者の数の区分に応じ、それぞれイ又はロに定める数

イ 利用者の数が六十以下 一以上

ロ 利用者の数が六十一以上 一に、利用者の数が六十を超えて四十又はその端数を増すごとに一を加えて得た数以上

2 前項の利用者の数は、前年度の平均値とする。ただし、新規に療養介護の事業を開始する場合その他これによることのできない場合は、推定数による。

3 第一項の療養介護の単位は、当該療養介護の提供が同時に一又は複数の利用者に対して一体的に行われるものをいい、複数の療養介護の単位を置く場合の当該療養介護の単位ごとの利用定員は二十人以上とする。

4 第一項第四号及び第五号に規定する療養介護事業所の職員は、専ら当該療養介護事業所の職務に従事する者又は療養介護の単位ごとに専ら当該療養介護を提供する者でなければならぬ。ただし、利用者の支援に支障がない場合は、この限りでない。

5 第一項第一号の管理者は、専らその職務に従事する者でなければならぬ。ただし、療養介護事業所の管理上支障がない場合は、当該療養介護事業所の他の業務に従事し、

又は当該療養介護事業所以外の事業所、施設等の業務に従事することができるものとする。

6 第一項第四号の生活支援員のうち、一人以上は、常勤の者でなければならない。

7 第一項第五号のサービス管理責任者のうち、一人以上は、常勤の者でなければならない。  
い。

(心身の状況等の把握)

第十二条 療養介護事業者は、療養介護の提供に当たっては、利用者の心身の状況、置かれている環境、他の保健医療サービス又は福祉サービスの利用状況等の把握に努めなければならない。

(障害福祉サービス事業者等との連携等)

第十三条 療養介護事業者は、療養介護を提供するに当たっては、地域及び家庭との結び付きを重視した運営を行い、市町村（特別区を含む。以下同じ。）又は他の障害福祉サービス事業者その他の保健医療サービス若しくは福祉サービスを提供する者との密接な連携に努めなければならない。

2 療養介護事業者は、療養介護の提供を終了するときは、当該療養介護の利用者又はその家族に対して適切な援助を行うとともに、保健医療サービス又は福祉サービスを提供する者との密接な連携に努めなければならない。

(利用者に求めることのできる金銭の支払の範囲等)

第十四条 療養介護事業者が、療養介護を提供する利用者に対して金銭の支払を求めることのできる場合は、当該金銭の使途が直接利用者の便益を向上させるものであって、当該利用者へ支払を求めることが適当である場合に限るものとする。

2 前項の規定により金銭の支払を求めるときは、当該利用者に対し、当該金銭の使途及び額並びに支払を求める理由を記載した書面によって説明を行い、その同意を得なければならない。

(療養介護の取扱方針)

第十五条 療養介護事業者は、次条第一項に規定する療養介護計画に基づき、利用者の心身の状況等に応じて、当該利用者の支援を適切に行うとともに、療養介護の提供が漫然かつ画一的なものとならないよう配慮しなければならない。

2 療養介護事業所の職員は、療養介護の提供に当たっては、懇切丁寧を旨とし、利用者又はその家族に対し、支援を行う上で必要な事項について、理解しやすいように説明を行わなければならない。

3 療養介護事業者は、利用者へ提供する療養介護の質の評価を行い、常にその改善を図

らなければならない。

(療養介護計画の作成等)

第十六条 サービス管理責任者は、療養介護に係る利用者及びその家族の生活に関する意向、総合的な支援の方針等を記載した個別支援計画（以下この章において「療養介護計画」という。）を作成しなければならない。

2 サービス管理責任者は、療養介護計画の作成に当たっては、適切な方法により、利用者について、その有する能力、置かれている環境その他の日常生活全般の状況等の評価を通じて当該利用者の希望する生活及び課題等の把握（以下この章において「アセスメント」という。）を行い、当該利用者が自立した日常生活を営むことができるように支援するため、適切な支援内容の検討を行わなければならない。

3 アセスメントは、利用者に面接して行わなければならない。この場合において、サービス管理責任者は、面接の趣旨を利用者に対して十分に説明し、理解を得なければならない。

4 サービス管理責任者は、アセスメント及び支援内容の検討結果に基づき、利用者及びその家族の生活に関する意向、総合的な支援の方針、生活全般の質を向上させるための課題並びに利用者についての療養介護の目標及びその達成時期、療養介護を提供する上での留意事項等を記載した療養介護計画の原案を作成しなければならない。この場合において、療養介護計画の原案には、当該療養介護事業所が提供する療養介護以外の保健医療サービス又はその他の福祉サービス等との連携を位置付けるよう努めなければならない。

5 サービス管理責任者は、療養介護計画の作成に係る会議（利用者に対する療養介護を提供する担当者等を招集して行う会議をいう。）を開催し、前項に規定する療養介護計画の原案の内容について意見を求めるものとする。

6 サービス管理責任者は、第四項に規定する療養介護計画の原案の内容について利用者又はその家族に対して説明を行い、文書により当該利用者の同意を得なければならない。

7 サービス管理責任者は、療養介護計画を作成したときは、当該療養介護計画を利用者に交付しなければならない。

8 サービス管理責任者は、療養介護計画の作成後に、当該療養介護計画の実施状況の把握（利用者についての継続的なアセスメントを含む。以下「モニタリング」という。）を行うとともに、少なくとも六月に一回以上、当該療養介護計画の見直しを行い、必要に応じて当該療養介護計画の変更を行うものとする。

9 サービス管理責任者は、モニタリングに当たっては、利用者及びその家族等との連絡

を継続的に行うこととし、特段の事情のない限り、定期的に利用者に面接しなければならない。

10 サービス管理責任者は、定期的にモニタリングの結果を記録しなければならない。

11 第二項から第七項までの規定は、第八項に規定する療養介護計画の変更について準用する。

(サービス管理責任者の責務)

第十七条 サービス管理責任者は、前条に規定する業務のほか、次に掲げる業務を行うものとする。

一 利用申込者の利用に際し、当該利用申込者に係る障害福祉サービス事業者等に対する照会等により、当該利用申込者の心身の状況、当該療養介護事業所以外における障害福祉サービス等の利用状況等を把握すること。

二 利用者の心身の状況、置かれている環境等に照らし、利用者が自立した日常生活を営むことができるかどうかについて定期的に検討するとともに、自立した日常生活を営むことができるかと認められる利用者に対し、必要な支援を行うこと。

三 他の職員への技術指導及び助言を行うこと。

(機能訓練)

第十八条 療養介護事業者は、利用者に対して、自立した日常生活に向けた心身の諸機能の維持回復を図るため、必要な機能訓練を行わなければならない。

(看護及び医学的管理の下における介護)

第十九条 療養介護事業者は、利用者の病状及び心身の状況に応じ、当該利用者の自立の支援及び日常生活の充実に資するよう、適切な技術をもって看護及び医学的管理の下における介護を行わなければならない。

2 療養介護事業者は、利用者の病状及び心身の状況に応じ、適切な方法により、排せつの自立について必要な援助を行わなければならない。

3 療養介護事業者は、おむつを使用せざるを得ない利用者のおむつを適切に取り替えなければならない。

4 療養介護事業者は、前三項に定めるもののほか、利用者に対し、離床、着替え及び整容その他日常生活上の支援を適切に行わなければならない。

5 療養介護事業者は、利用者に対して、当該利用者の負担により、当該療養介護事業所の職員以外の者による看護及び介護を受けさせてはならない。

(その他のサービスの提供)

第二十条 療養介護事業者は、利用者のためのレクリエーション行事を行うよう努めなけ

ればならない。

2 療養介護事業者は、常に利用者の家族との連携を図るとともに、利用者とその家族の交流等の機会を確保するよう努めなければならない。

(緊急時等の対応)

第二十一条 療養介護事業所の職員は、療養介護の提供時に利用者に病状の急変が生じた場合その他必要な場合は、速やかに病状に応じた治療が可能な専門の医療機関への連絡を行う等の必要な措置を講じなければならない。

(管理者の責務)

第二十二条 療養介護事業所の管理者は、当該療養介護事業所の職員及び業務の管理その他の管理を一元的に行わなければならない。

2 療養介護事業所の管理者は、当該療養介護事業所の職員にこの章の規定を遵守させるため必要な指揮命令を行うものとする。

(勤務体制の確保等)

第二十三条 療養介護事業者は、利用者に対し、適切な療養介護を提供するために、療養介護事業所ごとに、職員の勤務の体制を定めておかなければならない。

2 療養介護事業者は、療養介護事業所ごとに、当該療養介護事業所の職員によって療養介護を提供しなければならない。ただし、利用者の支援に直接影響を及ぼさない業務については、この限りでない。

3 療養介護事業者は、職員の資質の向上のために、研修の機会を確保しなければならない。

(定員の遵守)

第二十四条 療養介護事業者は、利用定員を超えて療養介護の提供を行ってはならない。ただし、災害、虐待その他のやむを得ない事情がある場合は、この限りでない。

(衛生管理等)

第二十五条 療養介護事業者は、利用者の使用する設備、食器等及び飲用に供する水について、衛生的な管理に努め、又は衛生上必要な措置を講じるとともに、医薬品及び医療機器の管理を適正に行わなければならない。

2 療養介護事業者は、療養介護事業所において感染症又は食中毒が発生し、又はまん延しないように、保健所の助言及び指導を求めるとともに、必要な措置を講じるよう努めなければならない。

(身体拘束等の禁止)

第二十六条 療養介護事業者は、療養介護の提供に当たっては、利用者又は他の利用者の

生命又は身体を保護するため緊急やむを得ない場合を除き、身体拘束その他利用者の行動を制限する行為（以下「身体拘束等」という。）を行ってはならない。

- 2 療養介護事業者は、やむを得ず身体拘束等を行う場合には、その態様及び時間、その際の利用者の心身の状況並びに緊急やむを得ない理由その他必要な事項を記録しなければならない。

（秘密保持等）

- 2 第二十七条 療養介護事業所の職員は、正当な理由がなく、その業務上知り得た利用者又はその家族の秘密を漏らしてはならない。

- 2 療養介護事業者は、当該療養介護事業所の職員であった者が、正当な理由がなく、その業務上知り得た利用者又はその家族の秘密を漏らすことがないよう、必要な措置を講じなければならない。

- 3 療養介護事業者は、他の療養介護事業者等に対して、利用者又はその家族に関する情報を提供するときは、あらかじめ文書により当該利用者又はその家族の同意を得ておかなければならない。

（苦情解決）

- 2 第二十八条 療養介護事業者は、利用者に対して提供した療養介護に関する当該利用者又はその家族からの苦情に迅速かつ適切に対応するために、苦情の受付窓口の設置その他の必要な措置を講じなければならない。

- 2 療養介護事業者は、前項の苦情を受け付けたときは、当該苦情の内容等を記録しなければならない。

- 3 療養介護事業者は、利用者に対して提供した療養介護に関し、市町村から指導又は助言を受けた場合は、当該指導又は助言に従って必要な改善を行わなければならない。

- 4 療養介護事業者は、市町村から求めがあった場合には、前項の改善の内容を市町村に報告しなければならない。

（事故発生時の対応）

- 2 第二十九条 療養介護事業者は、利用者に対する療養介護の提供により事故が発生したときは、必要な措置を講じるとともに、当該事故の状況及び当該事故に対し講じた措置について、都道府県、市町村、当該利用者の家族等に連絡しなければならない。

- 2 療養介護事業者は、前項の事故の状況及び当該事故に対して講じた措置について、記録しなければならない。

- 3 第一項の事故による損害のうち療養介護事業者が賠償すべきものについては、速やかに賠償しなければならない。

### 第三章 生活介護

#### (基本方針)

第三十条 生活介護の事業は、利用者が自立した日常生活又は社会生活を営むことができるよう、専ら法第五条第七項に規定する厚生労働省令で定める者に対して、入浴、排せつ及び食事の介護、創作的活動又は生産活動の機会の提供その他の便宜を適切かつ効果的に行うものでなければならない。

#### (構造設備)

第三十一条 生活介護の事業を行う者（以下「生活介護事業者」という。）が当該事業を行う事業所（以下「生活介護事業所」という。）の配置、構造及び設備は、利用者の特性に応じて工夫され、かつ、日照、採光、換気等利用者の保健衛生に関する事項及び防災について十分考慮されたものでなければならない。

#### (管理者の資格要件)

第三十二条 生活介護事業所の管理者は、社会福祉法（昭和二十六年法律第四十五号）第十九条第一項各号のいずれかに該当する者若しくは社会福祉事業（社会福祉法第二条第一項に規定する社会福祉事業をいう。以下同じ。）に二年以上従事した者又はこれらと同等以上の能力を有すると認められる者でなければならない。

#### (運営規程)

第三十三条 生活介護事業者は、生活介護事業所ごとに、次に掲げる事項を記載した事業の運営についての重要事項に関する運営規程を定めておかなければならない。

- 一 事業の目的及び運営の方針
- 二 職員の職種、員数及び職務の内容
- 三 営業日及び営業時間
- 四 利用定員
- 五 生活介護の内容並びに利用者から受領する費用の種類及びその額
- 六 通常の事業の実施地域
- 七 サービスの利用に当たつての留意事項
- 八 緊急時等における対応方法
- 九 非常災害対策に関する事項
- 十 事業の主たる対象とする障害の種類を定めた場合には、当該障害の種類
- 十一 虐待の防止のための措置に関する事項
- 十二 その他事業の運営についての重要事項

#### (規模)

第三十四条 生活介護事業所の施設並びに設備及び備品は、二十人以上の人員が利用できるものでなければならない。ただし、離島その他の地域であつて知事が定めるものうち、将来的にも利用者の確保の見込みがないとして知事が認める地域において生活介護の事業を行う生活介護事業所については、十人以上とすることができる。

(設備)

第三十五条 生活介護事業所は、生活介護の事業の用に供する専用の設備として、訓練・作業室、相談室、洗面所、便所及び多目的室その他運営上必要な設備を設けなければならない。ただし、利用者の支援に支障がない場合は、この限りでない。

2 前項に規定する設備の基準は、次の各号に掲げる設備の区分に応じ、当該各号に定めるものとする。

一 訓練・作業室

イ 訓練又は作業に支障がない広さを有すること。

ロ 訓練又は作業に必要な機械器具等を備えること。

二 相談室 室内における談話の漏えいを防ぐための間仕切り等を設けること。

三 洗面所 利用者の特性に応じたものであること。

四 便所 利用者の特性に応じたものであること。

3 第一項に規定する相談室及び多目的室は、利用者の支援に支障がない場合は、兼用することができる。

(職員)

第三十六条 生活介護事業者が生活介護事業所ごとに置くべき職員は、次の各号に掲げるものとし、その員数は、それぞれ当該各号に定めるところによる。

一 管理者 一

二 医師 利用者に対して日常生活上の健康管理及び療養上の指導を行うために必要な数

三 看護職員（保健師又は看護師若しくは准看護師をいう。以下この条、第四十九条及び第五十六条において同じ。）  
イ 理学療法士又は作業療法士及び生活支援員の総数は、生活介護の単位

ごとに、常勤換算方法で、(1)から(3)までに掲げる平均障害程度区分（知事が定めるところにより算定した障害程度区分の平均値をいう。以下同じ。）に応じ、それぞれ(1)から(3)までに定める数とする。

(1) 平均障害程度区分が四未満 利用者の数を六で除して得た数以上

(2) 平均障害程度区分が四以上五未満 利用者の数を五で除して得た数以上

- (3) 平均障害程度区分が五以上 利用者の数を三で除して得た数以上
- ロ 看護職員の員数は、生活介護の単位ごとに、一以上とする。
  - ハ 理学療法士又は作業療法士の員数は、利用者に対して日常生活を営むために必要な機能の減退を防止するための訓練を行う場合にあっては、生活介護の単位ごとに当該訓練を行うために必要な数とする。
  - ニ 生活支援員の員数は、生活介護の単位ごとに、一以上とする。
  - 四 サービス管理責任者 イ又はロに掲げる利用者の数の区分に応じ、それぞれイ又はロに定める数
    - イ 利用者の数が六十以下 一以上
    - ロ 利用者の数が六十一以上 一に、利用者の数が六十を超えて四十又はその端数を増すごとに一を加えて得た数以上
  - 2 前項の利用者の数は、前年度の平均値とする。ただし、新規に生活介護の事業を開始する場合その他これによることができない場合は、推定数による。
  - 3 第一項の生活介護の単位は、当該生活介護の提供が同時に一又は複数の利用者に対して一体的に行われるものをいい、複数の生活介護の単位を置く場合の生活介護の単位ごとの利用定員は、二十人以上とする。
  - 4 第一項第三号の理学療法士又は作業療法士を確保することが困難な場合は、これらの者を、日常生活を営むために必要な機能の減退を防止するための訓練を行う能力を有する看護師その他の者（以下「機能訓練指導員」という。）に代えることができる。
  - 5 第一項（第一号に掲げる者を除く。）及び前項に規定する生活介護事業所の職員は、専ら当該生活介護事業所の業務に従事する者又は生活介護の単位ごとに専ら当該生活介護を提供する者でなければならない。ただし、利用者の支援に支障がない場合は、この限りでない。
  - 6 第一項第一号の管理者は、専らその職務に従事する者でなければならない。ただし、生活介護事業所の管理上支障がない場合は、当該生活介護事業所の他の業務に従事し、又は当該生活介護事業所以外の事業所、施設等の業務に従事することができる。
  - 7 第一項第三号の生活支援員のうち、一人以上は、常勤の者でなければならない。
  - 8 第一項第四号のサービス管理責任者のうち、一人以上は、常勤の者でなければならない。
- い。
- （従たる事業所を設置する場合における特例）
- 第三十七条 生活介護事業者は、生活介護事業所における主たる事業所（以下この条において「主たる事業所」という。）と一体的に管理運営を行う事業所（以下この条にお

て「従たる事業所」という。）を設置することができる。

2 従たる事業所の施設並びに設備及び備品は、六人以上の人員が利用できるものでなければならぬ。

3 従たる事業所を設置する場合においては、主たる事業所及び従たる事業所の職員（管理者及びサービス管理責任者を除く。）のうちそれぞれ一人以上は、常勤の者で、かつ、専ら当該主たる事業所又は従たる事業所の職務に従事する者でなければならない。

（サービス提供困難時の対応）

第三十八条 生活介護事業者は、当該生活介護事業所の通常の事業の実施地域（当該事業所が通常時にサービスを提供する地域をいう。以下同じ。）等を勘案し、利用申込者に対し自ら適切な生活介護を提供することが困難である場合は、適当な他の生活介護事業者等の紹介その他の必要な措置を速やかに講じなければならない。

（介護）

第三十九条 生活介護事業者は、利用者の心身の状況に応じ、当該利用者の自立の支援及び日常生活の充実に資するよう、適切な技術をもって介護を行わなければならない。

2 生活介護事業者は、利用者の心身の状況に応じ、適切な方法により、排せつの自立について必要な援助を行わなければならない。

3 生活介護事業者は、おむつを使用せざるを得ない利用者のおむつを適切に取り替えなければならない。

4 生活介護事業者は、前三項に定めるもののほか、利用者に対し、離床、着替え及び整容その他日常生活に必要な支援を適切に行わなければならない。

5 生活介護事業者は、常時一人以上の職員を介護に従事させなければならない。

6 生活介護事業者は、利用者に対して、当該利用者の負担により、当該生活介護事業所の職員以外の者による介護を受けさせてはならない。

（生産活動）

第四十条 生活介護事業者は、生産活動の機会を提供に当たっては、地域の実情並びに製品及びサービスの需給状況等を考慮して行うよう努めなければならない。

2 生活介護事業者は、生産活動の機会に当たっては、生産活動に従事する利用者の作業時間、作業量等が当該利用者の過重な負担とならないように配慮しなければならない。

3 生活介護事業者は、生産活動の機会の提供に当たっては、生産活動の能率の向上が図られるよう、利用者の障害の特性等を踏まえた工夫を行わなければならない。

4 生活介護事業者は、生産活動の機会の提供に当たっては、防じん設備又は消火設備の

設置等生産活動を安全に行うために必要かつ適切な措置を講じなければならない。

(工賃の支払)

第四十一条 生活介護事業者は、生産活動に従事している利用者には、生産活動に係る事業の収入から当該事業に必要な経費を控除した額に相当する額の工賃を支払わなければならない。

(食事)

第四十二条 生活介護事業者は、あらかじめ、利用者に対し食事の提供の有無を説明し、生活介護事業者が食事を提供する場合には、その内容及び費用に関して説明を行い、当該利用者の同意を得なければならない。

2 生活介護事業者は、食事の提供に当たっては、利用者の心身の状況及びし好を考慮し、適切な時間に食事の提供を行うとともに、利用者の年齢及び障害の特性に応じた、適切な栄養量及び内容の食事を提供するため、必要な栄養管理を行わなければならない。

3 調理は、あらかじめ作成された献立に従って行われなければならない。

4 生活介護事業者は、食事の提供を行う場合であって、生活介護事業所に栄養士を置かないときは、献立の内容、栄養価の算定及び調理の方法について保健所等の指導を受けるよう努めなければならない。

(健康管理)

第四十三条 生活介護事業者は、常に利用者の健康状態に注意するとともに、健康保持のための適切な措置を講じなければならない。

(緊急時等の対応)

第四十四条 生活介護事業所の職員は、生活介護の提供時に利用者に病状の急変が生じた場合その他必要な場合は、速やかに医療機関への連絡を行う等の必要な措置を講じなければならない。

(衛生管理等)

第四十五条 生活介護事業者は、利用者の使用する設備、食器等及び飲用に供する水について、衛生的な管理に努め、又は衛生上必要な措置を講じるとともに、健康管理等に必要となる機械器具等の管理を適正に行わなければならない。

2 生活介護事業者は、生活介護事業所において感染症又は食中毒が発生し、又はまん延しないよう、保健所の助言及び指導を求めるなど、必要な措置を講じるよう努めなければならない。

(協力医療機関)

第四十六条 生活介護事業者は、利用者の病状の急変等に備えるため、あらかじめ、協力

医療機関（協力を得ることができる医療機関をいう。）を定めておかなければならない。  
（準用）

第四十七条 第八条、第十二条から第十七条まで、第二十二条から第二十四条まで及び第二十六条から第二十九条までの規定は、生活介護の事業について準用する。この場合において、第十五条第一項中「次条第一項」とあるのは「第四十七条において準用する次条第一項」と、第十六条中「療養介護計画」とあるのは「生活介護計画」と、第十七条中「前条」とあるのは「第四十七条において準用する前条」と読み替えるものとする。

#### 第四章 自立訓練（機能訓練）

##### （基本方針）

第四十八条 自立訓練のうち身体機能の向上に係るもの（以下「自立訓練（機能訓練）」という。）の事業は、利用者が自立した日常生活又は社会生活を営むことができるよう、専ら身体障害者に対して、一年六月間（けい髄損傷による四肢の麻痺その他これに類する状態にある利用者にあつては、三年間）にわたり、身体機能又は生活能力の維持、向上等のために必要な訓練その他の便宜を適切かつ効果的に行うものでなければならない。

##### （職員）

第四十九条 自立訓練（機能訓練）の事業を行う者（以下「自立訓練（機能訓練）事業者」という。）が当該事業を行う事業所（以下「自立訓練（機能訓練）事業所」という。）ごとに置くべき職員は、次の各号に掲げるものとし、その員数は、それぞれ当該各号に定めるところによる。

- 一 管理者 一
- 二 看護職員、理学療法士又は作業療法士及び生活支援員
- イ 看護職員、理学療法士又は作業療法士及び生活支援員の総数は、常勤換算方法で、利用者の数を六で除して得た数以上とする。
- ロ 看護職員の員数は、一以上とする。
- ハ 理学療法士又は作業療法士の員数は、一以上とする。
- ニ 生活支援員の員数は、一以上とする。
- 三 サービス管理責任者 イ又はロに掲げる利用者の数の区分に応じ、それぞれイ又はロに定める数
- イ 利用者の数が六十以下 一以上
- ロ 利用者の数が六十一以上 一に、利用者の数が六十を超えて四十又はその端数を増すごとに一を加えて得た数以上

2 自立訓練（機能訓練）事業者が、自立訓練（機能訓練）事業所における自立訓練（機

能訓練)に併せて、利用者の居宅を訪問することにより自立訓練(機能訓練)(以下この条において「訪問による自立訓練(機能訓練)」という。)を提供する場合は、自立訓練(機能訓練)事業所ごとに、前項に規定する員数の職員に加えて、当該訪問による自立訓練(機能訓練)を提供する生活支援員を一人以上置くものとする。

3 第一項の利用者の数は、前年度の平均値とする。ただし、新規に自立訓練(機能訓練)の事業を開始する場合その他これによることができない場合は、推定数による。

4 第一項第二号の理学療法士又は作業療法士を確保することが困難な場合は、これらの者を機能訓練指導員に代えることができる。

5 第一項(第一号に掲げる者を除く。)、第二項及び前項に規定する自立訓練(機能訓練)事業所の職員は、専ら当該自立訓練(機能訓練)事業所の業務に従事する者でなければならぬ。ただし、利用者の支援に支障がない場合は、この限りでない。

6 第一項第一号の管理者は、専らその職務に従事する者でなければならない。ただし、自立訓練(機能訓練)事業所の管理上支障がない場合は、当該自立訓練(機能訓練)事業所以外の業務に従事し、又は当該自立訓練(機能訓練)事業所以外の事業所、施設等の業務に従事することができる。

7 第一項第二号の看護職員のうち、一人以上は、常勤の者でなければならない。

8 第一項第二号の生活支援員のうち、一人以上は、常勤の者でなければならない。

9 第一項第三号のサービス管理責任者のうち、一人以上は、常勤の者でなければならない。

#### (訓練)

第五十条 自立訓練(機能訓練)事業者は、利用者の心身の状況に応じ、当該利用者の自立の支援及び日常生活の充実に資するよう、適切な技術をもって訓練を行わなければならない。

2 自立訓練(機能訓練)事業者は、利用者に対し、当該利用者の有する能力を活用することにより、自立した日常生活又は社会生活を営むことができるよう、当該利用者の心身の状況に応じた必要な訓練を行わなければならない。

3 自立訓練(機能訓練)事業者は、常時一人以上の職員を訓練に従事させなければならない。

4 自立訓練(機能訓練)事業者は、利用者に対して、当該利用者の負担により、当該自立訓練(機能訓練)事業所の職員以外の者による訓練を受けさせてはならない。

#### (地域生活へ移行するための支援)

第五十一条 自立訓練(機能訓練)事業者は、利用者が地域において自立した日常生活又

は社会生活を営むことができるよう、第六十条第一項に規定する就労移行支援事業者その他の障害福祉サービス事業を行う者等と連携し、必要な調整を行わなければならない。

- 2 自立訓練（機能訓練）事業者は、利用者が地域において安心した日常生活又は社会生活を営むことができるよう、当該利用者が住宅等における地域での生活に移行した後、一定期間、定期的な連絡、相談等を行わなければならない。

（準用）

第五十二条 第八条、第十二条から第十七条まで、第二十二条から第二十四条まで、第二十六条から第二十九条まで、第三十一条から第三十五条まで、第三十七条、第三十八条及び第四十二条から第四十六条までの規定は、自立訓練（機能訓練）の事業について準用する。この場合において、第十五条第一項中「次条第一項」とあるのは「第五十二条において準用する次条第一項」と、第十六条第一項、第二項、第四項から第八項まで及び第十一項中「療養介護計画」とあるのは「自立訓練（機能訓練）計画」と、同条第八項中「六月」とあるのは「三月」と、第十七条中「前条」とあるのは「第五十二条において準用する前条」と読み替えるものとする。

#### 第五章 自立訓練（生活訓練）

（基本方針）

第五十三条 自立訓練のうち生活能力の向上に係るもの（以下「自立訓練（生活訓練）」という。）の事業は、利用者が自立した日常生活又は社会生活を営むことができるよう、専ら知的障害者又は精神障害者に対して、二年間（長期間の入院その他これに類する事由のある利用者にあつては、三年間）にわたり、生活能力の維持、向上等のために必要な支援、訓練その他の便宜を適切かつ効果的に行うものでなければならない。

（規模）

第五十四条 自立訓練（生活訓練）の事業を行う事業所（以下「自立訓練（生活訓練）事業所」という。）の施設並びに設備及び備品は、二十人以上の人員が利用できるものでなければならない。ただし、離島その他の地域であつて知事が定めるもののうち、将来的にも利用者の確保の見込みがないとして知事が認める地域において自立訓練（生活訓練）の事業を行う自立訓練（生活訓練）事業所（宿泊型自立訓練（自立訓練（生活訓練））のうち、利用者に対して居室その他の設備において、家事等の日常生活能力を向上するための支援を行うものをいう。以下同じ。）のみを行うものを除く。）については、十人以上とすることができる。

- 2 前項の規定にかかわらず、宿泊型自立訓練及び宿泊型自立訓練以外の自立訓練（生活訓練）を併せて行う自立訓練（生活訓練）事業所は、宿泊型自立訓練に係る十人以上の

人員及び宿泊型自立訓練以外の自立訓練（生活訓練）に係る二十人以上（前項ただし書の知事が認める地域において事業を行うものにあつては、十人以上）の人員が利用できる施設並びに設備及び備品を有するものでなければならない。

（設備）

第五十五条 自立訓練（生活訓練）事業所は、自立訓練（生活訓練）の事業の用に供する専用の設備として、訓練・作業室、相談室、洗面所、便所及び多目的室その他運営上必要な設備を設けなければならない。ただし、利用者の支援に支障がない場合は、この限りでない。

2 前項に規定する設備の基準は、次の各号に掲げる設備の区分に応じ、当該各号に定めるものとする。

一 訓練・作業室

イ 訓練又は作業に支障がない広さを有すること。

ロ 訓練又は作業に必要な機械器具等を備えること。

二 相談室 室内における談話の漏えいを防ぐための間仕切り等を設けること。

三 洗面所 利用者の特性に応じたものであること。

四 便所 利用者の特性に応じたものであること。

3 宿泊型自立訓練を行う自立訓練（生活訓練）事業所にあつては、第一項に規定する設備のほか、自立訓練（生活訓練）の事業の用に供する専用の設備として、居室及び浴室を設けるものとし、その基準は、次の各号に掲げる設備の区分に応じ、当該各号に定めるものとする。ただし、利用者の支援に支障がない場合は、この限りでない。

一 居室

イ 一の居室の定員は、一人とすること。

ロ 一の居室の面積は、収納設備等の占める面積を除き、七・四三平方メートル以上とすること。

二 浴室 利用者の特性に応じたものであること。

4 第一項に規定する相談室及び多目的室は、利用者の支援に支障がない場合は、兼用することができる。

5 第一項の規定にかかわらず、宿泊型自立訓練のみを行う自立訓練（生活訓練）事業所にあつては、同項に規定する訓練・作業室を設けないことができる。

6 宿泊型自立訓練の事業を行う者が当該宿泊型自立訓練の事業を行う事業所（次項において「宿泊型自立訓練事業所」という。）の建物（利用者の日常生活のために使用しない附属の建物を除く。次項において同じ。）は、耐火建築物（建築基準法（昭和二十五

年法律第二百一十号)第二条第九号の二に規定する耐火建築物をいう。次項において同じ。  
　)又は準耐火建築物(同法第二条第九号の三に規定する準耐火建築物をいう。次項において同じ。)でなければならぬ。

7 前項の規定にかかわらず、次の各号のいずれかの要件を満たす木造かつ平屋建ての宿泊型自立訓練事業所の建物であつて、火災の際の利用者の安全性が確保されていると認められるものであるときは、耐火建築物又は準耐火建築物とすることを要しない。

一 スプリンクラーの設置、天井等の内装材等への難燃性の材料の使用、調理室等火災が発生するおそれがある箇所への防火区画の設置等により、初期消火及び延焼の抑制に配慮した構造であること。

二 非常警報設備の設置等による火災の早期発見及び通報の体制が整備されており、円滑な消火活動が可能なものであること。

三 避難口の増設、搬送を容易に行うために十分な幅員を有する避難路の確保等により、円滑な避難が可能な構造であり、かつ、避難訓練を頻繁に実施すること、次条の規定により置くべき職員の員数を超える員数の職員を置くこと等により、火災時の円滑な避難が可能なものであること。

(職員)

第五十六条 自立訓練(生活訓練)の事業を行う者(以下「自立訓練(生活訓練)事業者」という。)が自立訓練(生活訓練)事業所ごとに置くべき職員は、次の各号に掲げるものとし、その員数は、それぞれ当該各号に定めるところによる。

- 一 管理者 一
- 二 生活支援員 常勤換算方法で、イに掲げる利用者の数を六で除して得た数とロに掲げる利用者の数を十で除して得た数の合計数以上
  - イ ロに掲げる利用者以外の利用者
  - ロ 宿泊型自立訓練の利用者
- 三 地域移行支援員 宿泊型自立訓練を行う場合は、一以上
- 四 サービス管理責任者 イ又はロに掲げる利用者の数の区分に応じ、それぞれイ又はロに定める数
  - イ 利用者の数が六十以下 一以上
  - ロ 利用者の数が六十一以上 一に、利用者の数が六十を超えて四十又はその端数を増すごとに一を加えて得た数以上

2 健康上の管理などの必要がある利用者がいること等により看護職員を置く自立訓練(生活訓練)事業所については、前項第二号中「生活支援員」とあるのは「生活支援員及

び看護職員」と、「常勤換算方法」とあるのは「生活支援員及び看護職員の総数は、常勤換算方法」と読み替えるものとする。この場合において、生活支援員及び看護職員の員数は、当該自立訓練（生活訓練）事業所ごとに、それぞれ一以上とする。

3 自立訓練（生活訓練）事業者が、自立訓練（生活訓練）事業所における自立訓練（生活訓練）に併せて、利用者の居宅を訪問することにより自立訓練（生活訓練）（以下この項において「訪問による自立訓練（生活訓練）」という。）を提供する場合は、前二項に規定する員数の職員に加えて、当該訪問による自立訓練（生活訓練）を提供する生活支援員を一人以上置くものとする。

4 第一項（第二項において読み替えられる場合を含む。）の利用者の数は、前年度の平均値とする。ただし、新規に自立訓練（生活訓練）の事業を開始する場合その他これによることができない場合は、推定数による。

5 第一項（第一号に掲げる者を除く。）及び第二項に規定する自立訓練（生活訓練）事業所の職員は、専ら当該自立訓練（生活訓練）事業所の業務に従事する者でなければならない。ただし、利用者の支援に支障がない場合は、この限りでない。

6 第一項第一号の管理者は、専らその職務に従事する者でなければならない。ただし、自立訓練（生活訓練）事業所の管理上支障がない場合は、当該自立訓練（生活訓練）事業所以外の業務に従事し、又は当該自立訓練（生活訓練）事業所以外の事業所、施設等の業務に従事することができるものとする。

7 第一項第二号又は第二項の生活支援員のうち、一人以上は、常勤の者でなければならない。

8 第一項第四号のサービス管理責任者のうち、一人以上は、常勤の者でなければならない。ただし、宿泊型自立訓練を行う自立訓練（生活訓練）事業所のサービス管理責任者について、利用者の支援に支障がない場合は、この限りでない。

（準用）

第五十七条 第八条、第十二条から第十七条まで、第二十二条から第二十四条まで、第二十六条から第二十九条まで、第三十一条から第三十三条まで、第三十七条、第三十八条、第四十二条から第四十六条まで、第五十条及び第五十一条の規定は、自立訓練（生活訓練）の事業について準用する。この場合において、第十五条第一項中「次条第一項」とあるのは「第五十七条において準用する次条第一項」と、第十六条第一項、第二項、第四項から第八項まで及び第十一項中「療養介護計画」とあるのは「自立訓練（生活訓練）計画」と、同条第八項中「六月」とあるのは「三月」と、第十七条中「前条」とあるのは「第五十七条において準用する前条」と、第三十七条第二項中「六人以上」とある

のは「宿泊型自立訓練以外の自立訓練（生活訓練）」については六人以上、宿泊型自立訓練については十人以上」と読み替えるものとする。

## 第六章 就労移行支援

### （基本方針）

第五十八条 就労移行支援の事業は、利用者が自立した日常生活又は社会生活を営むことができるよう、専ら就労を希望する六十五歳未満の障害者であつて、通常の事業所に雇用されることが可能と見込まれる者に対して、二年間（専らあん摩マツサージ指圧師、はり師又はきゆう師の資格の取得を目的として、生産活動、職場体験その他の活動の機会の提供その他の就労に必要な知識及び能力の向上のために必要な訓練、求職活動に関する支援、適性に応じた職場の開拓、就職後における職場への定着のために必要な相談その他の必要な支援を供与する場合にあつては、三年間又は五年間）にわたり、生産活動その他の活動の機会の提供を通じて、就労に必要な知識及び能力の向上のために必要な訓練その他の便宜を適切かつ効果的に行うものでなければならない。

### （認定就労移行支援事業所の設備）

第五十九条 第六十六条において準用する第三十五条の規定にかかわらず、あん摩マツサージ指圧師、はり師、きゆう師等に関する法律（昭和二十二年法律第二百十七号）第二条第一項又は第十八条の二第一項の規定による学校又は養成施設（以下この章において「学校又は養成施設」という。）として認定されている就労移行支援事業所（以下この章において「認定就労移行支援事業所」という。）は、学校又は養成施設として必要とされる設備を有するものとする。

### （職員）

第六十条 就労移行支援の事業を行う者（以下「就労移行支援事業者」という。）が当該事業を行う事業所（以下「就労移行支援事業所」という。）ごとに置くべき職員は、次の各号に掲げるものとし、その員数は、それぞれ当該各号に定めるところによる。

- 一 管理者 一
- 二 職業指導員及び生活支援員
  - イ 職業指導員及び生活支援員の総数は、常勤換算方法で、利用者の数を六で除して得た数以上とする。
  - ロ 職業指導員の員数は、一以上とする。
  - ハ 生活支援員の員数は、一以上とする。
- 三 就労支援員 常勤換算方法で、利用者の数を十五で除して得た数以上
- 四 サービス管理責任者 イ又はロに掲げる利用者の数の区分に応じ、それぞれイ又は

ロに定める数

イ 利用者の数が六十以下 一以上

ロ 利用者の数が六十一以上 一に、利用者の数が六十を超えて四十又はその端数を増すごとに一を加えて得た数以上

2 前項の利用者の数は、前年度の平均値とする。ただし、新規に就労移行支援の事業を開始する場合その他これによることができない場合は、推定数による。

3 第一項（第一号に掲げる者を除く。）に規定する就労移行支援事業所の職員は、専ら当該就労移行支援事業所の業務に従事する者でなければならない。ただし、利用者の支援に支障がない場合は、この限りでない。

4 第一項第一号の管理者は、専らその職務に従事する者でなければならない。ただし、就労移行支援事業所の管理上支障がない場合は、当該就労移行支援事業所の他の業務に従事し、又は当該就労移行支援事業所以外の事業所、施設等の業務に従事することができるものとする。

5 第一項第二号の職業指導員又は生活支援員のうち、いずれか一人以上は、常勤の者でなければならない。

6 第一項第三号の就労支援員のうち、一人以上は、常勤の者でなければならない。

7 第一項第四号のサービス管理責任者のうち、一人以上は、常勤の者でなければならない。

（認定就労移行支援事業所の職員）

第六十一条 前条の規定にかかわらず、認定就労移行支援事業所ごとに置くべき職員は、次の各号に掲げるものとし、その員数は、それぞれ当該各号に定めるところによる。

一 管理者 一

二 職業指導員及び生活支援員

イ 職業指導員及び生活支援員の総数は、常勤換算方法で、利用者の数を十で除して得た数以上とする。

ロ 職業指導員の員数は、一以上とする。

ハ 生活支援員の員数は、一以上とする。

三 サービス管理責任者 イ又はロに掲げる利用者の数の区分に応じ、それぞれイ又はロに定める数

イ 利用者の数が六十以下 一以上

ロ 利用者の数が六十一以上 一に、利用者の数が六十を超えて四十又はその端数を増すごとに一を加えて得た数以上

2 前項の職員及びその員数については、前条第二項から第五項まで及び第七項の規定を準用する。

(実習の実施)

第六十二条 就労移行支援事業者は、利用者が第六十六条において準用する第十六条に規定する就労移行支援計画に基づいて実習できるように、実習の受入先を確保しなければならない。

2 就労移行支援事業者は、前項の実習の受入先の確保に当たっては、公共職業安定所、障害者就業・生活支援センター及び特別支援学校等の関係機関と連携して、利用者の意向及び適性を踏まえて行うよう努めなければならない。

(求職活動の支援等の実施)

第六十三条 就労移行支援事業者は、公共職業安定所で行う手続その他の利用者が行う求職活動を支援しなければならない。

2 就労移行支援事業者は、公共職業安定所、障害者就業・生活支援センター及び特別支援学校等の関係機関と連携して、利用者の意向及び適性に応じた求人の開拓に努めなければならない。

(職場への定着のための支援の実施)

第六十四条 就労移行支援事業者は、利用者の職場への定着を促進するため、障害者就業・生活支援センター等の関係機関と連携して、利用者が就職した日から六月以上、職業生活における相談等の支援を継続しなければならない。

(就職状況の報告)

第六十五条 就労移行支援事業者は、毎年度、前年度における就職した利用者の数その他の就職に関する状況を、県に報告しなければならない。

(準用)

第六十六条 第八条、第十二条から第十七条まで、第二十二条から第二十四条まで、第二十六条から第二十九条まで、第三十一条から第三十五条まで、第三十七条、第三十八条、第四十条から第四十六条まで及び第五十条の規定は、就労移行支援の事業について準用する。この場合において、第十五条第一項中「次条第一項」とあるのは「第六十六条において準用する次条第一項」と、第十六条第一項、第二項、第四項から第八項まで及び第十一項中「療養介護計画」とあるのは「就労移行支援計画」と、同条第八項中「六月」とあるのは「三月」と、第十七条中「前条」とあるのは「第六十六条において準用する前条」と、第三十四条ただし書及び第三十七条第一項中「生活介護事業所」とあるのは「就労移行支援事業所（認定就労移行支援事業所を除く。）」と読み替えるものとする。

る。

## 第七章 就労継続支援A型

### (基本方針)

第六十七条 雇用契約の締結による就労の機会の提供、生産活動の機会の提供及び就労に必要な知識及び能力の向上のために必要な訓練その他の必要な支援を供与する就労継続支援に係る障害福祉サービス（以下「就労継続支援A型」という。）の事業は、利用者が自立した日常生活又は社会生活を営むことができるよう、専ら通常の事業所に雇用されることが困難であつて、雇用契約に基づく就労が可能である者に対して、当該者を雇用して就労の機会を提供するとともに、その知識及び能力の向上のために必要な訓練その他の便宜を適切かつ効果的に行うものでなければならない。

### (管理者の資格要件)

第六十八条 就労継続支援A型の事業を行う者（以下「就労継続支援A型事業者」という。）が当該事業を行う事業所（以下「就労継続支援A型事業所」という。）の管理者は、社会福祉法第十九条第一項各号のいずれかに該当する者、社会福祉事業に二年以上従事した者、企業経営の経験を有する者又はこれらと同等以上の能力を有すると認められる者でなければならない。

### (規模)

第六十九条 就労継続支援A型事業所の施設並びに設備及び備品は、十人以上の人員が利用できるものでなければならない。

2 就労継続支援A型事業者が第七十四条第二項の規定により雇用契約を締結していない利用者に対して就労継続支援A型を提供する場合にあつては、当該事業所における雇用契約を締結している利用者に係る利用定員は、十人を下回ってはならない。

3 就労継続支援A型事業所における雇用契約を締結していない利用者に係る利用定員は、九又は当該就労継続支援A型事業所の利用定員に百分の五十を乗じて得た数のいずれか少ない数を超えてはならない。

### (設備)

第七十条 就労継続支援A型事業所は、当該就労継続支援A型の事業の用に供する専用の設備として、訓練・作業室、相談室、洗面所、便所及び多目的室その他運営上必要な設備を設けなければならない。ただし、利用者の支援に支障がない場合は、この限りでない。

2 前項に規定する設備の基準は、次の各号に掲げる設備の区分に応じ、当該各号に定めるものとする。

一 訓練・作業室

イ 訓練又は作業に支障がない広さを有すること。

ロ 訓練又は作業に必要な機械器具等を備えること。

二 相談室 室内における談話の漏えいを防ぐための間仕切り等を設けること。

三 洗面所 利用者の特性に応じたものであること。

四 便所 利用者の特性に応じたものであること。

3 第一項に規定する訓練・作業室は、利用者への支援に支障がない場合は、設けられないことができる。

4 第一項に規定する相談室及び多目的室その他必要な設備については、利用者の支援に支障がない場合は、兼用することができる。

(職員)

第七十一条 就労継続支援A型事業者が就労継続支援A型事業所ごとに置くべき職員は、

次の各号に掲げるものとし、その員数は、それぞれ当該各号に定めるところによる。

一 管理者 一

二 職業指導員及び生活支援員

イ 職業指導員及び生活支援員の総数は、常勤換算方法で、利用者の数を十で除して得た数以上とする。

ロ 職業指導員の員数は、一以上とする。

ハ 生活支援員の員数は、一以上とする。

三 サービス管理責任者 イ又はロに掲げる利用者の数の区分に応じ、それぞれイ又はロに定める数

イ 利用者の数が六十以下 一以上

ロ 利用者の数が六十一以上 一に、利用者の数が六十を超えて四十又はその端数を増すごとに一を加えて得た数以上

2 前項の利用者の数は、前年度の平均値とする。ただし、新規に就労継続支援A型の事業を開始する場合その他これによることのできない場合は、推定数による。

3 第一項（第一号に掲げる者を除く。）に規定する就労継続支援A型事業所の職員は、専ら当該就労継続支援A型事業所の業務に従事する者でなければならない。ただし、利用者の支援に支障がない場合は、この限りでない。

4 第一項第一号の管理者は、専らその職務に従事する者でなければならない。ただし、就労継続支援A型事業所の管理上支障がない場合は、当該就労継続支援A型事業所の他の業務に従事し、又は当該就労継続支援A型事業所以外の事業所、施設等の業務に従事

することができるものとする。

5 第一項第二号の職業指導員又は生活支援員のうち、いずれか一人以上は、常勤の者でなければならない。

6 第一項第三号のサービス管理責任者のうち、一人以上は、常勤の者でなければならない。

(従たる事業所を設置する場合における特例)

第七十二条 就労継続支援A型事業者は、就労継続支援A型事業所における主たる事業所(以下この条において「主たる事業所」という。)と一体的に管理運営を行う事業所(以下この条において「従たる事業所」という。)を設置することができる。

2 従たる事業所の施設並びに設備及び備品は、十人以上の人員が利用できるものでなければならぬ。

3 従たる事業所を設置する場合には、主たる事業所及び従たる事業所の職員(管理者及びサービス管理責任者を除く。)のうちそれぞれ一人以上は、常勤の者で、かつ、専ら当該主たる事業所又は従たる事業所の業務に従事する者でなければならない。

(実施主体)

第七十三条 就労継続支援A型事業者が社会福祉法人以外の者である場合は、当該就労継続支援A型事業者は、専ら社会福祉事業を行う者でなければならない。

2 就労継続支援A型事業者は、障害者の雇用の促進等に関する法律(昭和三十五年法律第二百二十三号)第四十四条第一項に規定する子会社以外の者でなければならない。

(雇用契約の締結等)

第七十四条 就労継続支援A型事業者は、就労継続支援A型の提供に当たっては、利用者と雇用契約を締結しなければならない。

2 前項の規定にかかわらず、就労継続支援A型事業者(多機能型により第八十二条に規定する就労継続支援B型の事業を一体的に行う者を除く。)は、通常の事業所に雇用されることが困難であつて、雇用契約に基づく就労が困難である障害者に対して雇用契約を締結せずに就労継続支援A型を提供することができる。

(就労)

第七十五条 就労継続支援A型事業者は、就労の機会の提供に当たっては、地域の実情並びに製品及びサービスの需給状況等を考慮して行うよう努めなければならない。

2 就労継続支援A型事業者は、就労の機会の提供に当たっては、作業の能率の向上が図られるよう、利用者の障害の特性等を踏まえた工夫を行わなければならない。

(賃金及び工賃)

第七十六条 就労継続支援A型事業者は、利用者が自立した日常生活又は社会生活を営むことを支援するため、利用者の賃金の水準を高めるよう努めなければならない。

2 就労継続支援A型事業者は、第七十四条第二項の規定による雇用契約に基づく就労が困難である障害者（以下この条において「雇用契約を締結していない利用者」という。）に対して、生産活動に係る事業の収入から当該事業に必要な経費を控除した額に相当する額の工賃を支払わなければならない。

3 就労継続支援A型事業者は、雇用契約を締結していない利用者が自立した日常生活又は社会生活を営むことができるよう支援するため、前項の規定により支払われる工賃の水準を高めるよう努めなければならない。

4 雇用契約を締結していない利用者それぞれに対して支払われる第二項の規定による工賃の一月当たりの平均額は、三千円を下回ってはならない。

（実習の実施）

第七十七条 就労継続支援A型事業者は、利用者が第八十一条において準用する第十六条に規定する就労継続支援A型計画に基づいて実習できるよう、実習の受入先の確保に努めなければならない。

2 就労継続支援A型事業者は、前項の実習の受入先の確保に当たっては、公共職業安定所、障害者就業・生活支援センター及び特別支援学校等の関係機関と連携して、利用者の意向及び適性を踏まえて行うよう努めなければならない。

（求職活動の支援等の実施）

第七十八条 就労継続支援A型事業者は、公共職業安定所で行う手続その他の利用者が行う求職活動の支援に努めなければならない。

2 就労継続支援A型事業者は、公共職業安定所、障害者就業・生活支援センター及び特別支援学校等の関係機関と連携して、利用者の意向及び適性に応じた求人の開拓に努めなければならない。

（職場への定着のための支援の実施）

第七十九条 就労継続支援A型事業者は、利用者の職場への定着を促進するため、障害者就業・生活支援センター等の関係機関と連携して、利用者が就職した日から六月以上、職業生活における相談等の支援の継続に努めなければならない。

（利用者及び職員以外の者の雇用）

第八十条 就労継続支援A型事業者は、利用者及び職員以外の者を就労継続支援A型の事業に従事する作業員として雇用する場合は、次の各号に掲げる利用定員の区分に応じ、当該各号に定める数を超えて雇用してはならない。

- 一 利用定員が十人以上二十人以下 利用定員に百分の五十を乗じて得た数
- 二 利用定員が二十人以上三十人以下 十又は利用定員に百分の四十を乗じて得た数のいずれか多い数
- 三 利用定員が三十一人以上 十二又は利用定員に百分の三十を乗じて得た数のいずれか多い数

(準用)

第八十一条 第八条、第十二条から第十七条まで、第二十二条から第二十四条まで、第二十六条から第二十九条まで、第三十一条、第三十三条、第三十八条、第四十二条から第四十六条まで及び第五十条の規定は、就労継続支援A型の事業について準用する。この場合において、第十五条第一項中「次条第一項」とあるのは「第八十一条において準用する次条第一項」と、第十六条中「療養介護計画」とあるのは「就労継続支援A型計画」と、第十七条中「前条」とあるのは「第八十一条において準用する前条」と読み替えるものとする。

#### 第八章 就労継続支援B型

(基本方針)

第八十二条 雇用契約の締結によらない就労の機会の提供、生産活動の機会の提供及び就労に必要な知識及び能力の向上のために必要な訓練その他の必要な支援を供与する就労継続支援(以下「就労継続支援B型」という。)の事業は、利用者が自立した日常生活又は社会生活を営むことができるよう、専ら通常の事業所に雇用されることが困難であつて、雇用契約に基づく就労が困難である者に対して、就労の機会を提供するとともに、生産活動その他の活動の機会の提供を通じて、その知識及び能力の向上のために必要な訓練その他の便宜を適切かつ効果的に行うものでなければならない。

(工賃の支払等)

- 第八十三条 就労継続支援B型の事業を行う者(以下「就労継続支援B型事業者」という。)は、利用者に、生産活動に係る事業の収入から当該事業に必要な経費を控除した額に相当する額の工賃を支払わなければならない。
- 2 前項の規定により利用者それぞれに対して支払われる工賃の一月当たりの平均額(第四項において「工賃の平均額」という。)は、三千円を下回ってはならない。
  - 3 就労継続支援B型事業者は、利用者が自立した日常生活又は社会生活を営むことを支援するため、工賃の水準を高めるよう努めなければならない。
  - 4 就労継続支援B型事業者は、年度ごとに、工賃の目標水準を設定し、当該工賃の目標水準及び前年度に利用者に対し支払われた工賃の平均額を、当該利用者に通知すると

もに、県に報告しなければならない。

(準用)

第八十四条 第八条、第十二条から第十七条まで、第二十二条から第二十四条まで、第二十六条から第二十九条まで、第三十一条、第三十三条、第三十四条、第三十八条、第四十条、第四十二条から第四十六条まで、第五十条、第六十八条、第七十条から第七十二条まで及び第七十七条から第七十九条までの規定は、就労継続支援B型の事業について準用する。この場合において、第十五条第一項中「次条第一項」とあるのは「第八十四条において準用する次条第一項」と、第十六条中「療養介護計画」とあるのは「就労継続支援B型計画」と、第十七条中「前条」とあるのは「第八十四条において準用する前条」と、第七十七条第一項中「第八十一条」とあるのは「第八十四条」と、「就労継続支援A型計画」とあるのは「就労継続支援B型計画」と読み替えるものとする。

## 第九章 多機能型に関する特例

(規模に関する特例)

第八十五条 多機能型による生活介護事業所(以下「多機能型生活介護事業所」という。)、自立訓練(機能訓練)事業所(以下「多機能型自立訓練(機能訓練)事業所」という。)、自立訓練(生活訓練)事業所(以下「多機能型自立訓練(生活訓練)事業所」という。)、就労移行支援事業所(以下「多機能型就労移行支援事業所」という。)、就労継続支援A型事業所(以下「多機能型就労継続支援A型事業所」という。)及び就労継続支援B型事業所(以下「多機能型就労継続支援B型事業所」という。)(以下「多機能型事業所」と総称する。)は、一体的に事業を行う各障害福祉サービス事業所の利用定員(多機能型による指定児童発達支援(児童福祉法に基づく指定障害児通所支援事業者の指定の申請者に関する事項並びに指定通所支援の事業等の人員、設備及び運営に関する基準を定める条例(平成二十四年広島県条例第六十一号。以下「指定通所支援基準条例」という。))第五条に規定する指定児童発達支援をいう。))の事業、指定医療型児童発達支援(指定通所支援基準条例第五十四条に規定する指定医療型児童発達支援をいう。))の事業又は指定放課後等デイサービス(指定通所支援基準条例第六十四条に規定する指定放課後等デイサービスをいう。))の事業(以下「多機能型児童発達支援事業等」という。))を一体的に行う場合にあつては、当該事業を行う事業所の利用定員を含むものとし、宿泊型自立訓練の利用定員を除く。)の合計が二十人以上である場合は、当該各障害福祉サービス事業所の利用定員を、次の各号に掲げる多機能型による各障害福祉サービス事業所の区分に応じ、当該各号に定める数とすることができる。

一 多機能型生活介護事業所、多機能型自立訓練(機能訓練)事業所及び多機能型就労

移行支援事業所（認定就労移行支援事業所を除く。） 六以上

二 多機能型自立訓練（生活訓練）事業所 六以上。ただし、宿泊型自立訓練及び宿泊型自立訓練以外の自立訓練（生活訓練）を併せて行う場合にあつては、宿泊型自立訓練の利用定員が十以上かつ宿泊型自立訓練以外の自立訓練（生活訓練）の利用定員が六以上とする。

三 多機能型就労継続支援A型事業所及び多機能型就労継続支援B型事業所 十以上

2 前項の規定にかかわらず、多機能型生活介護事業所が、主として重度の知的障害及び重度の上肢、下肢又は体幹の機能の障害が重複している障害者に対して障害福祉サービスを提供するとともに、多機能型児童発達支援事業等を一体的に行う場合にあつては、第三十四条の規定にかかわらず、その利用定員を、当該多機能型生活介護事業所で行う全ての障害福祉サービスの事業を通じて五人以上とすることができる。

3 多機能型生活介護事業所が、主として重症心身障害児（児童福祉法第七条第二項に規定する重症心身障害児をいう。）に対して多機能型児童発達支援事業等を一体的に行う場合にあつては、第三十四条の規定にかかわらず、その利用定員を、当該多機能型生活介護事業所で行う全ての障害福祉サービスの事業を通じて五人以上とすることができる。

4 離島その他の地域であつて知事が定めるもののうち、将来的にも利用者の確保の見込みがないとして知事が認める地域において事業を行う多機能型事業所は、第一項中「二十人」とあるのは「十人」とする。この場合において、障害福祉サービスが提供されていないこと等により障害福祉サービスを利用することが困難な地域において事業を行う多機能型事業所（多機能型生活介護事業所、多機能型自立訓練（機能訓練）事業所、多機能型自立訓練（生活訓練）事業所及び多機能型就労継続支援B型事業所に限る。以下この条及び次条第四項において同じ。）については、多機能型による各障害福祉サービス事業所の利用定員を、一人以上とすることができる。

（職員の員数等の特例）

第八十六条 多機能型事業所は、当該多機能型事業所の利用定員の数（多機能型児童発達支援事業等を一体的に行う場合にあつては、当該多機能型児童発達支援事業等を行う事業所の利用定員を含む。）の合計が二十人未満である場合は、第三十六条第七項、第四十九条第七項及び第八項、第五十六条第七項、第六十条第五項及び第六項並びに第七十一条第五項（第八十四条において準用する場合を含む。）の規定にかかわらず、当該多機能型事業所に置くべき職員（多機能型児童発達支援事業等を一体的に行う場合にあつては、指定通所支援基準条例の規定により当該事業を行う事業所に置くべき職員（指定通所支援基準条例第六条第一項第二号に規定する児童発達支援管理責任者を除く。）を

含むものとし、管理者、医師及びサービス管理責任者を除く。）のうち、一人以上の者を常勤としなければならない。

2 多機能型事業所は、第三十六条第一項第四号及び第八項、第四十九条第一項第三号及び第九項、第五十六条第一項第四号及び第八項、第六十条第一項第四号及び第七項並びに第七十一条第一項第三号及び第六項（これらの規定を第八十四条において準用する場合を含む。）の規定にかかわらず、一体的に事業を行う各障害福祉サービス事業所のうち知事が定めるものを一の事業所であるとみなして、当該一の事業所とみなされた事業所に置くべきサービス管理責任者の数を、次の各号に掲げる当該多機能型事業所の利用者の数の合計の区分に応じ、当該各号に定める数とする。

一 利用者の数の合計が六十以下 一以上  
二 利用者の数の合計が六十一以上 一に、利用者の数の合計が六十を超えて四十又はその端数を増すごとに一を加えて得た数以上

3 前項の規定により置くべきサービス管理責任者のうち、一人以上は、常勤の者でなければならぬ。

4 前条第四項後段の規定により、多機能型による各障害福祉サービス事業所の利用定員を一人以上とすることができることとされた多機能型事業所は、第三十六条第一項第三号二及び第七項、第四十九条第一項第二号ロ及びニ、第七項並びに第八項、第五十六条第一項第二号及び第七項並びに第八十四条において準用する第七十一条第一項第二号及び第五項の規定にかかわらず、一体的に事業を行う各障害福祉サービス事業所を一の事業所であるとみなして、当該一の事業所とみなされた事業所に置くべき生活支援員の数を、常勤換算方法で、第一号に掲げる利用者の数を六で除して得た数と第二号に掲げる利用者の数を十で除して得た数の合計数以上とする。

一 多機能型による生活介護、自立訓練（機能訓練）及び自立訓練（生活訓練）の利用者  
二 多機能型による就労継続支援B型の利用者  
5 前項の規定により置くべき生活支援員のうち、一人以上は、常勤の者でなければならぬ。

（設備の特例）

第八十七条 多機能型の事業を行う者は、サービスの提供に支障のないよう配慮しつつ、多機能型事業所において一体的に事業を行う各障害福祉サービス事業所の設備を兼用することができる。

(規則への委任)

第八十八条 この条例で定めるもののほか、障害福祉サービスの事業の設備及び運営に関して必要な事項は、規則で定める。

## 附 則

(施行期日)

第一条 この条例は、平成二十五年四月一日から施行する。

(宿泊型自立訓練に関する経過措置)

第二条 法附則第四十八条の規定によりなお従前の例により運営をすることができることとされた法附則第四十六条の規定による改正前の精神保健及び精神障害者福祉に関する法律（昭和二十五年法律第二百二十三号。以下「旧精神保健福祉法」という。）第五十条の二第一項第一号に掲げる精神障害者生活訓練施設（以下「精神障害者生活訓練施設」という。）、同項第二号に掲げる精神障害者授産施設（精神障害者通所授産施設（精神障害者授産施設のうち通所による利用者のみを対象とするものをいう。）を除く。以下「精神障害者入所授産施設」という。）、法附則第五十八条第一項の規定によりなお従前の例により運営をすることができることとされた法附則第五十二条の規定による改正前の知的障害者福祉法（昭和三十五年法律第三十七号。以下「旧知的障害者福祉法」という。）第二十一条の六に規定する知的障害者更生施設（知的障害者更生施設のうち知的障害者入所更生施設に限る。以下「知的障害者更生施設」という。）、旧知的障害者福祉法第二十一条の七に規定する知的障害者授産施設（知的障害者授産施設のうち知的障害者入所授産施設に限る。以下「知的障害者授産施設」という。）及び旧知的障害者福祉法第二十一条の人に規定する知的障害者通所寮について、第五十五条第三項の規定を適用する場合には、同項第一号イ中「一人」とあるのは、精神障害者生活訓練施設及び精神障害者入所授産施設（廃止前の精神障害者社会復帰施設の設備及び運営に関する基準（平成十二年厚生省令第八十七号）附則第三条の適用を受けるものを除く。）にあつては「二人以下」、精神障害者生活訓練施設及び精神障害者入所授産施設（廃止前の精神障害者社会復帰施設の設備及び運営に関する基準附則第三条の適用を受けるものに限る。）、知的障害者更生施設、知的障害者授産施設並びに知的障害者通所寮にあつては「四人以下」とし、同号ロ中「一の居室の面積は」とあるのは「利用者一人当たりの床面積は」とし、同号ロ中「七・四三平方メートル」とあるのは、精神障害者生活訓練施設及び精神障害者入所授産施設にあつては「四・四平方メートル」、知的障害者更生施設、知的障害者授産施設及び知的障害者通所寮にあつては「六・六平方メートル」とする。

(規模に関する経過措置等)

第三条 次の各号に掲げる者が法附則第四十一条第一項の規定によりなお従前の例により運営をすることができることとされた同項に規定する身体障害者更生援護施設及び知的障害者援護施設又は法附則第四十八条の規定によりなお従前の例により運営をすることができることとされた同条に規定する精神障害者社会復帰施設(第三号において「身体障害者更生援護施設等」という。)に併設して引き続き生活介護、自立訓練(機能訓練)、自立訓練(生活訓練)、就労移行支援又は就労継続支援B型の事業を行う間は、第三十四条(第五十二条、第六十六条及び第八十四条において準用する場合を含む。以下この条において同じ。)及び第五十四条第一項の規定にかかわらず、当該事業に係る生活介護事業所、自立訓練(機能訓練)事業所、自立訓練(生活訓練)事業所、就労移行支援事業所又は就労継続支援B型事業所(当該事業を多機能型により行う場合並びにこれらの事業所が第三十四条ただし書及び第五十四条第一項ただし書の規定の適用を受ける場合を除く。)の利用定員は、十人以上とすることができる。

一 平成十八年十月一日前に既に法附則第八条第一項第六号に規定する障害者デイサービスの事業を行っていた者

二 平成十八年十月一日前に既に旧精神保健福祉法第五十条の二第六項に規定する精神障害者地域生活支援センターを経営する事業を行っていた者

三 平成十八年十月一日前に既に身体障害者更生援護施設等(障害者自立支援法の一部の施行に伴う関係政令の整備に関する政令(平成十八年政令第三百二十号)第十六条の規定による改正前の社会福祉法施行令(昭和三十三年政令第八十五号)第一条第一号、第二号又は第四号に規定する身体障害者授産施設、知的障害者授産施設又は精神障害者授産施設に限る。)を経営する事業を行っていた者

## 2

法第五号第二十六項に規定する地域活動支援センター又は小規模作業所(障害者基本法(昭和四十五年法律第八十四号)第二条第一号に規定する障害者の地域社会における作業活動の場として同法第十八条第三項の規定により必要な費用の助成を受けている施設をいう。)のうち平成二十年四月一日から平成二十四年三月三十一日までの間に障害福祉サービス事業を開始したものにおける第三十四条(第五十二条、第六十六条及び第八十四条において準用する場合を含む。)及び第五十四条第一項並びに第八十五条第四項の適用については、「離島その他の地域であつて知事が定めるもののうち、将来的にも利用者の確保の見込みがないとして知事が認める地域」とあるのは「将来的にも利用

(身体障害者更生施設等に関する経過措置)

第四条 法附則第四十一条第一項の規定によりなお従前の例により運営をすることができることとされた旧身体障害者福祉法第二十九条に規定する身体障害者更生施設、旧身体障害者福祉法第三十条に規定する身体障害者療護施設若しくは身体障害者授産施設、旧精神保健福祉法第五十条の二第一項第三号に掲げる精神障害者福祉ホーム又は知的障害者更生施設、知的障害者授産施設若しくは知的障害者通勤寮の建物（基本的な設備が完成していたものを含み、平成十八年十月一日以後に増築、又は改築その他の建物の構造を変更したものを除く。）であつて、同日以後この条例の施行の日まで引き続き使用されてゐるものにおいて、療養介護の事業、生活介護の事業、自立訓練（機能訓練）の事業、自立訓練（生活訓練）の事業、就労移行支援の事業、就労継続支援A型の事業又は就労継続支援B型の事業を行う場合におけるこれらの施設の設備については、当分の間、第十条、第三十五条第一項（第五十二条、第六十六条において準用する場合を含む。）、第五十五条第一項又は第七十条第一項（第八十四条において準用する場合を含む。）に規定する多目的室を設けないことができる。

（従たる事業所に関する経過措置）

第五条 身体障害者授産施設又は知的障害者更生施設若しくは知的障害者授産施設が、生活介護の事業、自立訓練（機能訓練）の事業、自立訓練（生活訓練）の事業、就労移行支援の事業、就労継続支援A型の事業又は就労継続支援B型の事業を行う場合においては、平成十八年十月一日前に於いて既に存していた分場（身体障害者授産施設の分場（身体障害者授産施設が当該身体障害者授産施設と一体的に管理運営を行う通所による施設支援を提供する施設であつて入所者が二十人未満の施設をいう。）並びに知的障害者更生施設の分場（知的障害者更生施設が当該知的障害者更生施設と一体的に管理運営を行う通所による施設支援を提供する施設であつて入所者が二十人未満の施設をいう。）並びに知的障害者授産施設が当該知的障害者授産施設と一体的に管理運営を行う通所による施設支援を提供する施設であつて入所者が二十人未満のものを含む、同日以後に増築、又は改築その他の建物の構造を変更したものを除く。）であつて、同日以後この条例の施行の日まで引き続き使用されているものを生活介護事業所、自立訓練（機能訓練）事業所、自立訓練（生活訓練）事業所、就労移行支援事業所、就労継続支援A型事業所又は就労継続支援B型事業所と一体的に管理運営を行う事業所（以下この条において「従たる事業所」という。）として設置している場合については、当分の間、第三十七条第二項及び第三項（これらの規定を第五十二条、第五十七条及び第六十六条において準用する場合を含む。）並びに第七十二条第二項及び第三

項（これらの規定を第八十四条において準用する場合を含む。）の規定は、適用しない。  
この場合において、当該従たる事業所に置くべき職員（サービス管理責任者を除く。）  
のうち一人以上は、専ら当該従たる事業所の業務に従事する者でなければならない。